

「分裂をもたらす」

2015年09月09日

ルカによる福音書 12章 49節～53節。「わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである。その火が既に燃えていたらと、どんなに願っていることか。しかし、わたしには受けねばならない洗礼がある。それが終わるまで、わたしはどんなに苦しむことだろう。あなたがたは、わたしが地上に平和をもたらすために来たと思うのか。そうではない。言っておくが、むしろ分裂だ。今から後、一つの家に五人いるならば、三人は二人と、二人は三人と対立して分かれるからである。父は子と、子は父と、／母は娘と、娘は母と、／しゅうとめは嫁と、嫁はしゅうとめと、／対立して分かれる。」

主イエスは「平和の主」と信じられ、崇められている。十字架と復活によって罪を赦し、神との平和を実現してくださった。神との平和は人と人との間に和解をもたらし、互いに受け入れ合って生きることであった。主イエスは確かに「平和の主」である。ところが、上記のように「わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである」また「あなたがたは、わたしが地上に平和をもたらすために来たと思うのか。そうではない。言っておくが、むしろ分裂だ」と語っている。この矛盾する言葉はどういう意味であろうか。

「その火が既に燃えていたらと、どんなに願っていることか」という言葉から「火」は人々の間で燃えさかる「愛」を期待していたと思われる。「火」とは「愛」であろう。主イエスは「愛」という「火」を投じるために来られた。ところが、律法の下に差別管理体制を築きあげてきた宗教家たちは主イエスの愛を受け入れず、激しく反発した。だから、主イエスは「しかし、わたしには受けねばならない洗礼がある。それが終わるまで、わたしはどんなに苦しむことだろう」と、十字架の死の苦しみを受けることになると言われた。

「愛」という言葉は甘美な響きがあり、全ての人が求める喜びがある。それは愛されることを期待しているからである。人を愛そうとしたら、苦難を負うことを覚悟しなければならない。そして、真実な愛は時代の価値観に切り込み、人々の間で争いを起こし、敵と味方に激しく対立させるものである。

マーティーン・ルーサー・キング牧師は黒人の公民権を獲得するために闘った。そのために、投獄され、爆弾を投げ込まれる争いの渦中に投げ込まれた。そして最後は、暴漢の銃によって殺害された。キング牧師の「私には夢がある」という「愛」は苦難と死を招いた。キング牧師の生と死は主イエスが投じた火、分裂を招いた真実な愛に従うことであったと思われる。愛は平和を約束するものであるが、主イエスの愛は分裂をもたらし、十字架の死に向かった。しかし、ここに「福音」があると告げている。

主イエスは続いて「今から後、一つの家に五人いるならば、三人は二人と、二人は三人と対立して分かれるからである。父は子と、子は父と、／母は娘と、娘は母と、／しゅうとめは嫁と、嫁はしゅうとめと、／対立して分かれる」と言われる。この言葉は、主イエスに信従する初代教会の家族間で見られた状況を反映していると思われる。

主イエスの福音は人間の生を絶対的に肯定する神の愛である。その愛を否定する力に対し「否」と言わざるを得ない。そこでは、争いと分裂は避けられない。しかし、キング牧師の闘いは差別する白人が人間に回復する「愛」を含んでいた。主イエスの十字架の愛は敵対する者たちを赦し、包み込むものであった。愛がもたらす分裂があっても、赦された者として神の前に共に立つ平和に裏打ちされているから、恐れることはない。